36

緒方洪庵と添田玄春

——西洋医学所頭取役宅の新築をめぐって

深瀬泰旦

江戸・西洋医学所の医師である添田玄春が文久三年に長崎に留学したことは、一昨年の仙台の総会で報告した。その留学に出発するに先立ち医学所頭取役宅の新築問題に関連して、玄春と頭取緒方洪庵との間に少なからぬ交渉があった。洪庵の書状や、医学所での勤務日誌ともいうべき「勤仕向日記」、さらには「添田玄春日記」からこの両者の関係を明らかにしたい。

緒方洪庵が文久二年に幕府に召されて出府したとき、まず最初に旅装をといたのは麻布南部坂の足守藩下屋敷であった。しかし早朝からの将軍拝診に不便をきたすとの理由で、日ならずして和泉橋通の伊東玄朴邸に転居した。

このおり、伊東邸では息子玄伯の妻が産褥時に麻疹にかかって危篤状態にあり、洪庵も供回りのものをおおく抱えているので、多大の迷惑をかけることを心苦しく思っていた。そこで頭取役宅の新築を上申するのと平行して、完成までの繋ぎとして医学所内の長屋に手をくわえ、仮役宅としてここに移転した。

洪庵の「勤仕向日記」と「玄春日記」のお互いの初出の記事は文久三年正月になってからであるが、これ以前に両者の交渉がなかったとは考えられず、洪庵が西洋医学所頭取に就任した文久二年閏八月以降、職場を同じくする頭取と医師としての交際がはじまったものと思われる。

単身江戸に下った——実は三男四郎（のちの惟孝）一人を伴っていた——洪庵にとって、単身赴任の不便さを解消するためにも一日も早く役宅を完成させて妻子を呼びよせたいと願っていた。しかし役宅建築は遅々としてすすまなかったので、万一役宅が未完成の間に妻八重親子が江戸へ到着した場合には玄春邸を借受けるつもりで、文久三年正月一九日に下見のために玄春邸を訪れた。

この日の「添田日記」には「緒方洪庵表座敷見ニ来」と簡潔にしるされているにすぎないが、洪庵の書状からさきのような洪庵の意図を読みとることができる。長崎留学への出立を二日後にひかえていた玄春は、その準備に多忙をきわめていたはずであるが、洪庵をこころよく迎え、受けいれに際しての手筈万端を打合わせたにちがいない。

八重一行が江戸に到着したのは文久三年三月二四日である。このとき役宅はまだ完成していなかったので、玄春側はさきの約束にしたがって「わが家の表座敷を使っていただきたい」と申しいれたが、八重たちがその申入れにしたがった様子はない。

この時期玄春はすでに長崎留学のために江戸をはなれていたので、留守をまもっていた妻きせ子や執事の計いで、八重たちの無事到着を祝って菓子折をもって挨拶におもむいた。さらに六月七日には、医学所の緒方洪庵、池田玄仲、そして俗事役である月岡勝次郎のもとに暑中見舞の使者をおくった。

洪庵が死亡した六月一〇日にも役宅はまだ完成していなかった。そのため八重は洪庵の葬儀を仮役宅の長屋でおこなわざるをえなかった、と無念の様子を名塩にいる妹億川ふくあての書状にしたためている。「土蔵も、ま事にひろひろと致居る」役宅に移転したのは、洪庵死去一七日後の六月二七日のことであった。

緒方洪庵と添田玄春は西洋医学所の同僚として、同じ蘭方医学を学ぶ医師として公的な交友がみられるが、私的にも家族の住居を斡旋するという親密な関係にあったといえよう。さらにそれを補強する事実として、洪庵の忘形見の三女七重と大槻俊斎の嗣子玄俊との結婚にあたって、玄春がすくなからぬ力をつくしている。

（順天堂大学医学部医史学研究室）